

「やくがい」と聞いて「薬書」かと思ったら「ヤク飼い」だった。何ワケのわからないことを、と言われそうだが、先週訪問したブータン王国での話だ。

国土の大半を山岳地帯が占め、まっすぐな道はほとんどない。日本語通訳兼ガイドを務める35歳のペマ・ワンチュクさんは標高4000mの高地で生まれ育ち、両親はヤクを遊牧する「ヤク飼い」だった。小学校まで歩いて2日。だから8歳の時、10歳のいとこと2



記 do-ki

青野 由利

ブータンに何を学ぶか

人で学校近くの小屋に住んで通った——驚くべき話を淡々と語る。今でこそヤク飼いは減ったというが、ブータンの日常に伝統文化が息づいていることも知った。

チベット仏教を信奉し人口80万人弱のうち1万人が僧侶。どの家にも仏間があって毎日お祈りする。「自分のため」ではなく「す

べての生き物が平和で苦しみがないうように」。あちこちで見かける経文の書かれた旗は風化して空気に溶け、通り道に平和をもたらす。病院では現代医療と伝統医療を自由に選べる。人々は当たり前民族衣装を着ている。ちなみに医療と教育は無料。ペマさんたちは普通にスマートフォンを使いこな

す現代青年でもある。

なるほど、「GNH（国民総幸福量）」に基づく生活の実践はこんなところにあるのだろうか。

開発の真の目的は「幸福」であり、「GDP（国内総生産）」では測れない。この理念に基づき前国王ワンチュク4世が1976年にGNHを提唱、憲法にも盛り込まれた。指標は「健康」「教育」「余暇や仕事のバランスがとれた時間の使い方」「精神的な満足」「多様で強靱な生態系」など9

項目。どれが欠けてもいけない。

今回、前国王の側近としてGNHを推進したティンレイ元首相にもお目にかかった。「多くの国でGNHについて話したが、日本ほど興味を示した国はなかった」。両国の文化と価値観に共通点があることに加え、「日本は歴史を振り返り熟慮する時にあるからだろう」という言葉が印象に残る。

戦後の灰の中から立ち上がり、経済発展で頂点を極めた。後はそこにしがみつくなか、降りるか。1

00年先、2000年先を考えた時、これまでと違う変化が必要だと国民が感じている、と言われればその通り。終戦から74年、「何が本当の繁栄か新たに定義し直すことが必要」という言葉も胸に染み込んだ。

実は、今回の訪問の主な目的は「高齢者医療の視察」。専門家らといっしょに山の上の小さな診療所や高齢者のための施設などをたずねた。話題は尽きないが、それは改めて。

（専門編集委員）